

## “走る”ことからみる文学

伊野家 伸一

### I

“走る”ということと、文学とはさほど繋がりがあるようには感じられないかもしれない。しかし、両者には意外と接点がみられるように思える。本稿においては、そこに目を向け、もって文学とは何かを考えてみることにしたい。

まず、走ること、特に長距離走者に目を向けた作家、文学者のエピソードをみることにする。

少々古いものとなるが、昭和 11 年（1936 年）に開催されたベルリンオリンピックでは、陸上一万メートルに日本代表として村社講平選手が出場、スタジアム正面にて当時のヒトラー総統も観戦するなか、後半まで先頭を切り続け、4 位でゴールした。このレースについて、武者小路実篤が「日本は負けたが、実際見ていると日本選手はよく闘った。殊に村社君は孤軍奮闘大いに努めたといっている。最後までよくねばったフィンランドの選手 3 人を相手に半分までは先頭をつとめ少しもくたばらず途中で抜かれてもまた抜き返したりした。最後にああいふ結果になったが 1 人で頑張った点は偉いと思った。4 人以外は皆引き離された」（村社講平「長距離を走りつづけて」『陸上競技マガジン 1974 年 2 月号』 ベースボール・マガジン社 91）という手記を朝日新聞に載せている。

また西篠八十も同レースにおける村社選手について

「1 人槍投げにおいて可憐なる大和撫子山本定子苦闘するといえども独人ライシエルの続々出すレコードを堰止むる由なく。またハイジャンプの 3 選手選ばれた 9 人の中に残るといえども残桜。ただ稍に白き恨みあり。僅最後の 10000m で夕日の光と共に我等の心を強く明るくしたのは村社君のねばりであった。遂に敗れたりといえども無慮始終常に厩大な外国選手の先頭を切って最後まで必勝を思わせて走りつづけたその寧ろ莊嚴な奮闘ぶり私はこれを見て漸く三斗の溜飲を下げた。殊に遠くから見ると村社君は吉川英治氏に似ているので最後まで親しい人が駆けているという気がしてならなかった。

この間私の両側のドイツ人達は一様に肩を叩いて『ヤパン勝つ。ヤパン勝つ』といひて慰めてくれた。オリンピックの第 2 日グルネワルドの丘風寒く長き旗竿の上ついに日章旗の影なし。我々はただ希望を明日にかけん」（同上）

との手記を残している。武者小路実篤は簡潔平易な表現で、西篠八十は当時ありがちな美辞麗句を用いた所感を示しているようにも思えるが、両者ともに村社選手とそのレースについて感銘を受けている様子がうかがえよう。また村社手記には、同五輪の日本水泳選手団長を務めた

末弘巖太郎博士が村社選手の健闘を称え、抱き上げたことも記されている。同博士は法社会学の先駆者とみなされているが、そうした法学者の名も同手記にはみられる。

今度はマラソンの円谷幸吉選手に目を向けることにする。彼は、昭和 39 年（1964 年）、東京オリンピックのマラソンで 3 位となり、銅メダルを獲得するが、その後故障と周囲の期待に応えることが出来ない状況に悩み、自ら頸動脈を剃刀で切って自殺する。彼の郷里、福島県須賀川市では、スポーツ施設「須賀川アリーナ」の一廓に、「円谷幸吉メモリアルホール」が設けられ、彼の遺品や関連資料が置かれている。そのなかには、円谷選手の自殺と彼が残した遺書について、川端康成が寄せたエッセイがある。以下は、そのエッセイと円谷選手の遺書である。

円谷選手は暮れの三十日から正月の二日まで古里の福島へ歸省してゐたさうで、母やきやうだいは、正月のことでもあるし、円谷選手にいろいろと國のものを食べさせたとみえる。「おいしゅうございました」といふものの多くは、古里の食べものである。みづからの命を断つて、この世に訣別するとき、それをいちいち思ひ出して禮をのべた。また十七人もの子か甥かに、一人一人その名を呼びかけ書きならべて、「立派な人になつてください。」のひとことを別辭とした。

そして、自殺にいたる苦悩と呵責については、ただ「幸吉はもうすっかり疲れ切つて走れません。何卒お許し下さい。」と書き、「幸吉は父母上様の側で暮らしとうございました。」との訴へで遺書を結んだ。この簡単平易な文章に、あるひは萬感こめた遺書のなかでは、相手ごとと食べものごとに繰り返される「おいしゅうございました。」といふ、ありきたりの言葉が、じつに純ないのちを生きてゐる。そして遺書全文の韻律をなしてゐる。美しく、まことで、かなしいひびきだ。なにしろ遺書であるから、かりそめの論評はつつしむが、円谷選手のこの文章は私の心にとまった。（須賀川アリーナ内円谷幸吉メモリアルホール展示資料より 『一草一花 11』）

<円谷幸吉遺書>

まず親族へ—

「父上様、母上様、三日とろろ美味しうございました、干し柿、モチも美味しうございました。

敏雄兄、姉上様、おすし美味しうございました。

克美兄、姉上様、ブドウ酒とリンゴ美味しうございました。

巖兄、姉上様、しそめし、南ばん漬け美味しうございました。

喜久造兄、姉上様、ブドウ液、養命酒美味しうございました。又、いつも洗濯ありがとうございました。

幸造兄、姉上様、往復車に便乗させて戴きありがとうございました。モンゴいか美味しうございました。

正男兄、姉上様、お気を煩わして大変申しわけありませんでした。

幸雄君、秀雄君、幹雄君、敏子ちゃん、ひで子ちゃん、良介君、敬久君、みよ子ちゃん、ゆき江ちゃん、光江ちゃん、彰君、芳幸君、恵子ちゃん、幸栄君、裕ちゃん、キーちゃん、正嗣君、立派な人になって下さい。

父上様、母上様、幸吉はもうすっかり疲れ切ってしまって走れません。

何卒お許し下さい。

気が安まることもなく御苦勞、御心配をお掛け致し申しわけありません。

幸吉は父母上様の側で暮らしとうございました」

・・・そして、一枚は自衛隊体育学校の関係者へ一。

「校長先生済みません。

高長課長何もなし得ませんでした。

宮下教官御厄介をお掛け通しで済みません。

企画室長お約束守れず相済みません。

メキシコ・オリンピックの御成功を祈り上げます。

一九六八・一」

(青山一郎 『栄光と孤独の彼方へ 円谷幸吉物語』 ベースボールマガジン社 12-13)

ここには、淡々とした文調ながら、遺書にみられる「ありきたりの言葉」に、「じつに純ないのち」を、またその繰り返しに、「美しくて、まことで、かなしいひびき」を奏でる韻律を感じ取っている日本を代表する作家川端康成がいる。

ここで川端康成は「じつに純ないのち」を円谷選手にみているが、円谷選手には次のような逸話もある。東京オリンピックに向け、初マラソンに挑んだ彼が 30 キロ付近にさしかかった時のことである。

幸吉は、むしようにノドが乾いた。こんなことは、練習のときにもなかったことだ。三十キロの飲物が置いてあるテーブルを見つけるや、たまらず水のはいったコップをわしづかみにし、一気に飲んだ。

この時である。

中尾と大谷の二人が、一気にスパートして、トップ集団から抜出した。

《しまった。やられた》幸吉は一瞬、虚を突かれた。コップを握りしめ、追えども追えども、先頭の二人にはどうしても追いつかない。

《足が思うように動かない。スパートしてもいっこうにトップとの差が縮まらない》

幸吉はあせった。

だがその時、右手に持ったガラスのコップを捨てようと思ってはっとした。《コップはガラスだ》幸吉は道路の端に寄って走りながら、伴走の報道車に手をさしのべた。

「このコップをお願いします。捨てるとうガラスが割れて危ないですから」  
報道車の中に放り出すようにすると、また道路の中央に出て、トップの追走にかかった。

・・・・・・・・レース終了後、報道車に乗っていた新聞記者は、この幸吉の行動を絶賛し、そのマナーの良さをこぞって報道した。

幸吉にしてみれば、何も特別な行為をしたわけではない。ただガラスのコップを捨てたら危いと思っただけだ。(青山 117-118)

生真面目すぎるほどの人間性が伝わってくる逸話である。円谷選手に「じつに純ないのち」を、その遺書から読み取った川端康成の目は確かというべきであろう。

また同メモリアルホールの「遺書について」という解説には、「・・・作家三島由紀夫は幸吉選手の死を『美しい自尊心による死』『ノイローゼなどという言葉で片付けたり、敗北と規定したりする、生きていた人間の思い上がりの醜さは許しがたい』と新聞で発表。・・・他にも多くの作家たちに影響を与えました」という記述もみられる。

川端、三島ともに、後年自殺によりその生涯を閉じた作家であることも不思議な繋がり、さらには、ある種の予兆をも感じさせるが、マラソンランナー円谷幸吉選手の遺書とそこからうかがえる彼の生き様、人間性が、こうした作家たちに何かを訴え、触発したものがあつたのではなかろうか。円谷選手の場合、五輪メダリストの自殺という衝撃的な要素があつたことは否めないが、その背景にある“走る”という所為に文学と重なるものがあるのではないか、ということも感じさせる作家たちの手記、エッセイといえようか。

## II

英文学の世界にも、“走る”ことを取り入れた作品がある。アラン・シリトー (Alan Sillitoe) による *The Loneliness of the Long-Distance Runner* がそれである。この作品は、家庭や経済的環境に恵まれず、非行に走った少年が、送り込まれた感化院 (Borstal) でクロス・カントリー走者になるよう命じられる。少年は、表面上その指示に従っているかのごとく振る舞い、練習にも取り組むが、本番のレースでは、先頭を切っているにもかかわらず、ゴール前で故意に棄権をする。その時少年は、彼を追い抜かすべき二番手走者がなかなかやって来ないことに苛立ちながらも「いや、おれはどんなことがあつたって奴らに見せつけてやるんだ。誠実 (honesty) とはどのようなものかを」(51) との思いを強く自らに説く。そして、ようやくやって来た二番手走者が、彼を抜きゴールする様を目にするのである。

作家シリトーについて、本作品の日本語版『長距離走者の孤独』の「解説」では、「《怒れる若者たち》とシリトー」として、「シリトーはいわゆる《怒れる若者たち》と呼ばれる一派とみ

なされるが、グループの中心となった作家たちは大学人であり、下層労働者階級に属するシリトーとは《怒り》の質が異なっていた。彼らは体制の変革とともに、その《怒り》も消えてしまったが、シリトーの主人公たちは、体制側が築いた規制への反発と、規制の垣根を守る偽善的な権力者に対するアナーキックな憤りを示し続けた」(226-227 筆者要約) ことが記されている。

ここに示されたシリトーの作品における特徴は、本作品においてもみられるところのものといえよう。主人公の少年コリン・スミスは、送られた感化院の院長を体制側の人間であり、偽善と権威の象徴とみなす。

I'm in Essex. It's supposed to be a good Borstal, at least that's what the governor said to me when I got here from Nottingham. "We want to trust you while you are in this establishment," he said, smoothing out his newspaper with lily-white workless hands, while I read the big words upside down: *Daily Telegraph*. "If you play ball with us, we'll play ball with you." (Honest to God, you'd have thought it was going to be one long tennis match.) "We want hard honest work and we want good athletics," he said as well. "And if you give us both these things you can be sure we'll do right by you and send you back into the world an honest man." Well, I could have died laughing, ... (9-10)

ここには、非行少年の矯正・指導に善意と誠意をもってあたろうと述べる感化院長の姿が、表面的なものでしかないことを見抜く少年の目が描かれている。少年は、「もし法の内にある連中 (the In-laws) が、おれの悪さを止めたいと思っているなら、時間のむだというものだ。いっそのことおれを壁の前に立たせ、一斉射撃でやってくれたほうが気がきいてるというものだ」(10) とまで考えるのである。

クロスカントリーで優勝を目前にしながら、レースを放棄しようとする際にも、少年は、二番手走者が大きく遅れていることに苛立つ自分に、「無法者であった父の死 (the Out-law death my dad died)」を思い出すことによって、レースの棄権即ち感化院長と権威・体制への反逆という決心を貫こうとする。少年の父親は喉頭癌で死んだのであるが、その時の様子は「病院へ連れて行こうとする医師たちに『出て行け』と怒鳴りつけ、痩せ衰えたからだだったにもかかわらず、医師らを階段まで追いかけていった。薬も医師の指示には従わず、薬草店の鎮痛薬のみであった。死の床では、全身血まみれで床や絨毯も血に染まっていた」(50) と語られている。そうした父親の姿を、少年は「今になっておれにははじめてわかるのだ。おやじがどんなに太い肝っ玉を持っていたかが」(50) と思い起こす。そして

No, I'll show him what honesty means if it's the last thing I do, . . . By God I'll stick this out like my dad stuck out his pain and kicked them doctors down the stairs: if he

had guts for that then I've got guts for this and here I stay waiting for Gunthorpe or Aylesham to bash that turf and go right slap-up against that bit of clothes-line stretched across the winning post. As for me, the only time I'll hit that clothes-line will be when I'm dead and a comfortable coffin's been got ready on the other side. Until then I'm a long-distance runner, crossing country all on my own no matter how bad it feels. (51-52)

との思いを少年は固くもつのである。このあたりには、病の悪化と死に瀕しても体制側への反抗を貫いた父親に思いを馳せることによって、自らも反抗を成し遂げようとする少年がみられる。

このように、シリトーは“走る”ことをとおして体制、権威、偽善に対して、反抗、反逆を試みる少年を描いているといえよう。

さらに、本作品の主人公は、クロス・カンントリーのレースで意図的に勝利を逸したことにより処罰を受け、重労働を課されるが、その結果肋膜炎を患い、それがために彼を軍隊に入れようという感化院長の目論見が果たされなかったことを痛快に思ったことを告白する (53)。そして、感化院出所後、再び悪事に手を染める様子を述べる。

I'm out now and the heat's switched on again, but the rats haven't got me for the last big thing I pulled. I counted six hundred and twenty-eight pounds and am still living off it because I did the job all on my own, ... I worked out my systems and hiding-places while pushing scrubbing-brushes around them Borstral floors, planned my outward life of innocence and honest work, yet at the same time grew perfect in the razor-edges of my craft for what I knew I had to do once free; and what I'll do again if netted by the poaching coppers. (54)

少年は、感化院収容という措置を受けたにもかかわらず、悪事、不道徳的行為でもって、権威と体制への反抗を試み続けるのである。こうしたあたりは、本作品の日本語版『長距離走者の孤独』の「解説」における「……不道徳行為に全生命を賭けることで、権威へのささやかなプロテストを試みる。だが、彼らの行動は、現在の階級から抜け出し、あるいは積極的に体制を破壊しようとする方向には向かわない。反体制的反抗ではなく、《非体制的》な反逆とも言うべきであろうか」(227)との指摘に重なるといえようか。

シリトーによるこうした作品とその特徴は、やはり彼の家庭環境や時代的背景が影響していると思われる。*Understanding Alan Sillitoe* の第一章“The Making of a Writer”では、シリトーが育った状況が記されており、借金がかさみ収監されるシリトーの父親についても触れられている。

Explains Sillitoe, “We lived in a room on Talbot Street whose four walls smelled of leaking gas, stale fat, and layers of mouldering wall-paper. My father’s thirty-year-old face was set like concrete, ready to hold back the tears of humiliation that he must have been pleased to find were not there when the plain-clothes came to take him away.” Because of a childhood illness, Sillitoe’s father was able to attend school for only one year and never learned to read or write. (2-3)

こうしたシリトーが置かれた貧困にして悲惨な境遇や父親の姿は、*The Loneliness of the Long-Distance Runner* の主人公が置かれた状況、また父親に対する思いや心情に繋がるものを感じさせる。

また “The Making of a Writer” には、シリトーがおかれた時代背景についても解説がなされている。シリトーが十代半ば頃には、教室は工場となり、シリトーも旋盤工として働く。そうしたなかで、社会主義への傾倒といったことも、彼のなかで起こったようである (4-5)。そして、労働者階級の生活を変革しようという労働党の動きも活発化する。しかし、シリトーが生まれ育ったイングランド中部工業都市ノッティンガムを含む地域では、労働者階級にさほどの変化は起こらなかった。シリトー自身「戦争は、皆の生活に歴大な改善を生ぜしめるほどに、状況を変えた」(6) と言っている。しかしながら、それは、真に幸福と改善をもたらすものではなかったのである。

For many, however, this new prosperity lasted only as long as the war itself, and much of the literature that emerged shortly after this time reflects this sense of discontent and a feeling of restlessness and resignation in the ironic acceptance of one’s fate, perhaps none so clearly as the works written by Allan Sillitoe. (6)

こうしたあたりから、*The Loneliness of the Long-Distance Runner* において、主人公の少年が反抗、反逆を試みる体制がみえてくるように思える。労働者階級や社会の底辺に生きる人々にとって、希望の光が感じられたとしても、それは戦時下における特需的な状況等によるものであり、時代や社会の動き、流れからすれば、いわば都合主義的、その場主義的なものでなく、下層階級にとって「希望を持つ、自らの世界を創り上げてゆく」ことは望むべくもない、そうした社会システムが体制なのだ。そして、体制側(シリトーの表現では、“the In-laws”)から示されてくる権威、偽善もまたその一部である。だから、コリン少年はその体制、偽善、権威に“走る”ことにより挑んでゆく。さらに、少年は、そうした態度を貫くことが「誠実」というものだ、と考えるのである。そこには「積極的に体制を破壊しようとする方向に向かわないが、不道徳行為に全生命を賭けることで、権威へのささやかなプロテストを試みる」意識

がみてとれる。よってコリン少年の行為は、先にみた本作品の日本語版『長距離走者の孤独』にある「解説」に照応するところのものといえるであろう。

シリトーによる *The Loneliness of the Long-Distance Runner* をみてきたが、そこには、少年の「体制に対する反抗」が看取された。興味深いことに、現実の長距離走者にも、少年と似た様子がみられた例がある。メキシコ・オリンピックでの銀メダル獲得を含め、3度五輪マラソンに出場した君原健二選手とその指導にあたった高橋進による手記「喜びも悲しみも長い道のり」には、「君原日記（昭和38年5月29日）」として、次のように記されている。

俺は思う。もしオリンピックに出場したら、いやできなくてもである。恐らく日本の競技者は俺に歯が立たないであろう。これは自慢でも自惚れでもない、当然のことである。

会社は休み、合宿を行ない、もはやプロである。このようなものが普通の競技会で勝って、なんの意義があろうか。

俺はオリンピックのためにアマチュアを放棄しつつある。いや放棄したことになっているかもしれない。実に情けないことである。

オリンピックが終わったら速かに退部届を提出せねばならぬ。

（陸上競技マガジン 1975年3月号 ベースボールマガジン社 101）

同手記には、高橋進による〔解説〕も付されているが、そちらには、君原選手が一貫して堅持したアマチュアリズムは純粋そのものであり、加熱したオリンピック対策には批判的であったこと、目的のために手段を選ばない合宿の連続や、特別な待遇に強く反発したことが記されている。そして

『長いもの』に巻かれて、そこからのがれようと（ムダ）な抵抗—カマキリがオノに向かうように健気にもがく姿が、そこにあった。

その『長いもの』の手先が私であり、オリンピック対策も必要悪と割切っている私に対して、君原が反発したくなる理由の1つでもあった。私は君原の純粋性に対して、もう少し大人の目になって清濁併せのむ成長を一方では願いながら、一方では、いつまでもこの純粋さが汚されないことを願う自己撞着に陥っていた。（同上 102）

といった高橋の当時の思いが綴られている。ここには、オリンピック代表の座が確約され、いわば体制側に位置するかに思えるアスリートが、体制側に反発する姿がみられる。*The Loneliness of the Long-Distance Runner* における少年と一脈通ずるものさえ伝わってくるように思われる。どのような組織、社会においても、体制側とそれが作り出す動きや流れに従うことを強いられる、あるいは翻弄されることになる側がある。そうした体制側に対する反発・



反抗が「走る世界」においてもみられることは、その種の問題が、人間と人間社会にとっていかに根深いものであるかを感じさせる。

本稿で取り上げた円谷幸吉選手も、東京五輪マラソンで銅メダルを手にするが、その後、英雄となった彼には、様々な競技会やイベントへの招待が殺到した。そして、「幸吉は、出来るだけ招待には応じて競技会や駅伝に出場したものの、東京オリンピック以後に休養を取らず、走り続けていた疲労がついに出来た」(青山 251)。後輩や格下の選手に後塵を拝するレース、試合が続き始める。そうしたなか、円谷選手は以前から交際があった女性との結婚を望むが、彼の所属先である自衛隊の上官から「次の五輪を控えた立場で、何を考えているか!」という強い反対にあう。しかも上官の態度は、女性の母親の気持ちをも硬化させ、縁談は破局状態となる(青山 262-267)。円谷選手の縁談を進めようとした彼の指導者であった島野教官も、上官と激突したことにより北海道へ左遷される(青山 269)。そうしたなかで、円谷選手を椎間板ヘルニアが襲う。手術を受けるも、回復どころか反って状態の悪化を招く。彼にとって最後の正月となった昭和 43 年 1 月、帰省した円谷選手は、婚約者だった女性が他の男性と結婚したことを告げられる。この時、郷里で行った「走り始め」も、腰痛のため十分と続かなかった(青山 311-312)。そして同月 8 日、自殺するのである。

こうした円谷選手の競技者としての姿に目を向けるならば、五輪メダリストといえども、時代や社会、組織がつくり出す潮流や趨勢に翻弄され、声をあげることもなく消えてゆく、さらに言えば、消されてゆく人間がみえてくる。

円谷メモリアルホールでは、彼について語る関係者のビデオも放映されているが、そのなかには、東京五輪にともに出場した君原が、円谷選手の墓に参る場面がある。墓石にビールをかけ、自分も一口飲む。その君原の様子は、少し荒々しい。そこには「誰が盟友円谷を死に追いやったか」という、ある種の怒りが感じられるようでもある。

「円谷を死に追いやったのは誰か」、そこには当時の時代、社会の流れや動き、国家機関である自衛隊という組織の存在がみえてくる。君原自身が反発し、抵抗しようとしたものが、円谷を自殺にまで追い込んだ、という思いが君原にはあるのかもしれない。

また君原自身 *The Loneliness of the Long-Distance Runner* のコリン少年とある意味同じように、体制側ではなかった子供時代を経験しているようである。勿論、コリン少年のように犯罪を行っていたということではないが、「かねて君原についての伝記のようなものが刊行されていましたが、美点だけを並べてゆがめられた映像に君原自身が釈然としないものをもっていました」(高橋進「まえがき」『マラソンの青春』君原健二・高橋進著 時事通信社 1977) という思いから、君原自らによって書かれた自伝には次のような箇所がある。

母の話だと、私はおとなしいというより、弱虫で、けんかをすれば必ず泣かされ、みんなと遊ぶときも遠くから眺めていることが多かったと聞いた。

...

先生の評価もなかなか手厳しくて、一年生のときは「真面目であるが余り向上しない。内気にて意志弱く、積極的に発表することなし」、三年生では「人と親しまず、自制心が乏しく常に争いがある。腕白ばかり多く、なにをやるにしてもボンヤリ外を眺めながらやるのででたらめになることが多い。なにを聞かれてもオロオロして答えない」とあった。腕白という件は、どうやら先生の眼鏡違いで信じられない。四年生のときは「発表などほとんどせず、悪いことをやった仲間にはほとんど入っています。学習に対する熱がなく、ただボーとしていることが多く、注意されても一向平気でいます」とあり、五年生では「温良ではあるが絶えずぼんやりとして真剣味がない。積極的に努力する気が少しもみられず、態度に明るさがない」とあった。

これらの指摘をよくみると、そのほとんどが、すずめ百までのいまだになおらない性向にあてはまっていて、汗顔の至りであることを痛感する。(77-78)

この後にも、

・友人に誘われて級長をしていた女の子の家に寄ったとき、女の子と口をきいたこともなく、成績のいい子は別世界の人間と思っていたため、その訪問がとても誇らしい気持ちにしてくれたこと。(78-79)

・中学校では駅伝選手として、試合の前日に、全校生徒の前で紹介されたときには、「なに事にも劣っている自分を意識しているだけに、全校を代表するのだという名誉の気持ちが強く迫って胸が一杯になった」こと。(81)

・高校での一学期終了時に受け取った成績表は、「あけてびっくり仰天した。クラスでビリである」ことが告白されており、その後努力するも、「卒業するまで私は一生懸命に頑張ったが、成績は低空飛行で、ビリにならないのがせめてもの慰めであった」こと。(82)

などが語られてゆく。さらに、昭和 16 年生まれの君原が育ってゆく時代は、日本（人）の多くがそうした環境の下に暮らしていたと思われるが、以下のような回想も記されている。

試合が近づくと、母は栄養に気を配って、食事のとき私にだけ卵や肉などを添えてくれた。これは有り難いことだが、ほかの兄弟に悪くて、いい気持ちはしなかった。両親は店をやっていたが、そう余裕のある生活もできないで四苦八苦していた。私もよく自転車で配達の手伝いをさせられた。勉強も練習もしなければならぬ私にとって、これは同級生にくらべて、みじめで寂しく悲しいことだった。日常生活でも、こうした辛さはいつもつきまとい、私はじっと我慢することを強いられた。(83)

これに続いて、「長距離選手として重要な精神的な忍耐力は、私のこのような環境から芽生えたのだと思う」と述べられている。

ここには、決して優等生、優れたスポーツ選手として華やかな少年時代があったのではなく、

むしろその反対であった様子うかがえる。また、経済的にも恵まれた状況ではなかったことも察することができる。

そうした君原選手であっても、否、そうであればこそ、心深くにある「優遇された側の傲慢さと、そうでない側の人々への思い」から、先にみたような反抗心も芽生えたといえようか。そこには、英国における労働者、それも下層階級とってよいコリン少年の境遇と言動に重なるものが浮かび上がってくるようにも思える。

文学には、声をあげたくともあげることが出来ない社会的弱者に目を向け、その声なき声に耳を傾け、その声を代弁する使命・責務があるはずである。*The Loneliness of the Long-Distance Runner* の少年は、感化院長など「体制側、権威を持つ者に物申す」ことはしない。自らが「誠実」と信じる行為でもって、それを示すのみである。その姿を、作家シリトーは“走る”ということ、長距離走者の姿でもって描いた。

では、なぜ「長距離走者」なのか。そこには、声なき声を発する者の姿があるからではないのか。*The Loneliness of the Long-Distance Runner* のコリン少年しかり、また現実の長距離走者、円谷選手、君原選手にも、オリンピック代表にしてメダリストという榮譽にもかかわらず、生き立ち、境遇、人間性等において、声なき声を発する者の姿が感じられないであろうか。

コリン少年からは、境遇に恵まれず、教育も十分ではなく、救いを求め、声をあげたくともその術を持たない、むしろ変革や幸福を求めること自体叶わぬことで、その絶望的な虚無感から反抗する若年者の姿が伝わってくる。そうした彼は、自らが行うことが出来る不道徳行為という反抗を試みている。円谷選手は、メダリストという榮譽、自衛隊員という立場、期待を向けられる情勢に、またその生真面目さゆえ、生身の人間として声をあげることを封じられてしまった。君原選手は、先述のごとく、五輪至上主義の矛盾を感じ、直接のコーチにこそ反抗を示したが、その考えや思いを公に示すことは出来ず、葛藤のなか走り続けたのであった。

本稿でみてきたごとく、作家、文学者が長距離走者に目を向けたのは、彼らのこうした姿ゆえではないのかと問いたい。

### III

ここまで、長距離走者に目を向けた作家等の作品や手記を通して、走る世界と文学との接点に何をみることが出来るかを考えてみた。最後に、もう一人の文学者が記したものを取り上げることにする。本稿で触れてきている円谷幸吉選手は、東京五輪では、マラソンだけでなく一万メートルにも出場し、6位に入賞しているが、高橋和巳は、その一万メートルについて「<志>ある文学」というエッセイを残した。「走る」と文学を考える資料として非常に示唆に富むものと思われるので、長くなるが、あえて全文を示す。

東京オリンピックの一万メートル競走にたいへん印象的な場面があった。名は忘れたが、

ある小国の選手が、他のすべての選手がゴールにはいったのち、ひとりおくれで走ってきた。観客はしんがりながら最後まで競技を棄てなかった彼の健闘ぶりに拍手し、その拍手に迎えられて彼もゴールにはいった。競技はその時終わったと思われた。

だが選手は依然ゴールをつきぬけて走っており、観客があっけにとられている中を、なお懸命に走り続けた。彼は完全に一周おくれをとっていたのだ。失笑が起りやがてそれは以前にも増す拍手となって、彼が一周しおわるまで鳴りやまなかった。

私も微笑しながらテレビでその選手の孤軍奮闘を見ていたが、やっとながら一周のおくれを取り戻して終着線にはいり、観衆もやれやれと思った時、さらに彼は走ったのである。一周ではなく二周おくれでいたのだ。爆笑が起り観衆もやや拍子ぬけした中を、折からの夕日を受けて彼は走った。そしてその時、おさえ難い滑稽感とともに、私はこの人は私の友だと思ったものだった。

いつの世にも人は幸運であり続けることはできない以上、志を貫くことには、ある滑稽感のまつわることがある。第三者の眼には、人と人との力量を比べあう競技はすでに終わっており、世間の関心は別な競技の方に移っているにもかかわらず、なお初志貫徹、ひとりで走り続けねばならぬこともある。観衆というものは、熱しやすく冷めやすい。時代全体の移り変りが、急テンポともなれば、なおさらのことである。

たとえば最近、野間宏が二十年を費やして『青年の環』を完成したと聞いたとき、私はトラックを二周おくれで独走する運動選手のことを思い出した。その志や善しと思ったのである。

どんな思想も最初は教えられるかたちで心の中へはいつてくる。どんな観念もはじめはちょっとした思いつきにすぎない。そして、それが学術的な知識や思いつきに終るか、一つの志となるかは、一にかかって持続するか否かにある。そしてその持続の間に、自己の行為や生活や存在のあり方と、どこまで深くかわらせるか、あるいは乾燥した観念にどれだけ情念を投入するかにかかっている。

『詩経』大序に「詩は志の之く所なり。心に在りては志と為り、言に発すれば詩となる」という言葉がある。当時、文学の主要ジャンルは詩であったから、詩で代表させただけであって、広く文学全体が志をいうものと解釈してよく、私もそう考えている。

詩そして文学は、志の表明なのである。

私にとってごく当然と思われるこの考えはしかし、必ずしも、わが国には通用しない。日本の文人は<思想>というものを、一種面はゆいもの、なんとなく非文学的なものと意識している。なぜだろう。

多分それはこういうことではないかと思う。わが国の近代化を推進した思想というのは、キリスト教的ヒューマニズムにせよ、進化論にせよ、社会主義にせよ、すべて風土を異にする異国から輸入されたものだった。思想はまず少数の知的上層階級に学ばれ、それが上からある部分は制度として生かされ、あるものは解説を付されて啓発的に下へ拡散さ

せられる。反抗の思想であるマルクス主義の受容形態もこの例外ではない。だから人々は思想といえば、ドイツ観念論なり、マルクス主義なりを思い浮かべてしまい、一種冷やかでごつごつしたもの、権威主義的なものと思込んでしまう。

そして日本近代文学の主流は、社会を指導する法科系エリートに対する反感を内包しており、俗物というのは、日本ではブルジョアのことであるよりも官僚的出世主義者のことであり、文人たちはむしろ「不遇」の側に身をおこうとした。いきおい狭義の思想を自己の文学から排除するということが起った。それはある意味では当然であって、生活そのものに密着しない思想は、とりわけ私小説的発想の文脈にのらず、日本の自然にはぐくまれた文人の美意識と乖離する。

あるゆるところに二重構造が生じ「愛」の観念や思想は思春期にヨーロッパの文学から学び、やや長じて男女の間のむずかしさを悟りはじめる年齢になると「情事」を描いた日本の文学にのめりこむといったぐあいである。

私は私小説に思想がないなどとは思わない。そのすぐれたものはむしろ官学系エリートが見落とした、より深い思想に立脚していると考え。ただ勢いあまって、自分の表現していることが、思想の表明ではないと、少なからぬ文人が思い込んでしまったところに、日本近代文学の不幸がある。

心にあれば志、言葉に表現されれば文学。これはすべての文人が心に自負とともに秘めていてよい基本的な思いであろう。そして、一見無色な、それ自体何の価値でもないような「持続」が、各々の志を豊饒化し、開花させるための唯一の道なのである。(160-163)

東京五輪一万メートルの最終走者が二周おくれとなっても、最後まで走り通した姿から、高橋和巳はここまで思惟をめぐらせている。そして、そこには、“走る”ことと「文学」を結ぶものとして<志>が示されている。文学者高橋和巳は、志と文学について語りながら、持続のなかにかに情念を盛り込み、そこから育まれる権威的ではない自然な思想というものを示そうとしている。そして、そこに文学の意義と価値を見出している。

高橋和巳が語り、示すところのものは、“走る”世界においてもあてはまるといえようか。本稿に紹介した長距離3選手は繋がりをもつ。円谷と君原については先述のごとくであるが、ベルリン五輪に出場した村社講平は、後年、東京五輪へ向け、円谷、君原の指導にあたる機会もあった。しかし、こうした関係も、「村社は円谷に肩入れしすぎている」という当時の風評により、解消されてゆく（「長距離を走りつづけて=23=」）。また、円谷の自殺は昭和43年1月8日だが、その自殺が知られたのは、翌9日であった。この日は、奇しくも、後に双子のマラソンランナーとして知られる宗兄弟15歳の誕生日にあたる。一つの終焉は、一つの胎動でもある。1984年（昭和59年）10月10日、兄弟ともに出場したロサンゼルス五輪を終えた宗兄弟は、ラジオ番組に出演、そこで「何か曲をかけましょう」と言われた際、彼らは『「一人の道」をお願いします』と応える。それは、円谷幸吉選手を歌ったフォークソングで、「・・・観衆が

ワーと声をあげました。円谷の姿がまもなくみえます・・・今みえました！円谷がみえました！！すぐ10m後方にイギリスのヒートリー！円谷あと350m、頑張れ円谷！・・・」というレースの実況で始まる歌となっている。これは勇壮な歌ではなく、自殺に至る円谷選手の心情を歌ったものとなっているが、ここからは、宗兄弟のなかにいる円谷が浮かび上がってくる。こうした繋がりの中、宗兄弟指導の下、幾人ものランナーたちが五輪に、世界の舞台に挑んでゆく。2011年3月11日には東北地方を震災と津波が襲い、円谷選手の郷里福島県は原発事故にも苦しめられる。その年、韓国テグで開催された世界陸上では、宗兄弟の指導を受ける堀端宏行選手が入賞を果たす。不思議なことに、堀端選手と円谷選手は顔立ちが、特に笑顔が似ている。

このように、“走る”世界においても、「一走者が最後まで走る」という持続だけではなく、「個人や時代を超えて持続」されるものがある。そして、そこには高橋和巳が言うように、情念、思想が盛り込まれ、育まれる様、＜志＞がみられよう。

高橋和巳は、五輪1万メートルの最終走者が2周遅れたにもかかわらず、最後まで走りきった姿を契機に、「持続—情念・思想—志」を感じ取っているが、“走る”世界と「文学」双方を繋ぐものとしてこれ以上のものはないであろう。高橋和巳によるエッセイはそれを提示している。高橋和巳が示すところから想起される作品として、太宰治による「走れ メロス」を挙げることも出来よう。誓いを果たし処刑されるために苦難に耐え走り、もって勇と真実在るを示すメロスは、＜志＞の姿に他ならないからである。「走れ メロス」が長く中学生用教科書に掲載されてきているのは、それゆえであろう。文学の低迷がいわれ、その価値が問われる今、「＜志＞ある文学」が語るところのものは大きいといえよう。

#### Works cited

Hanson, Gillian Mary. *Understanding Alan Sillitoe*. Columbia, South

Carolina: The University of South Carolina Press, 1999.

Sillitoe, Alan. *The Loneliness of the Long-Distance Runner*. New York: Alfred A. Knopf, Inc, 1992.

青山一郎. 『栄光と孤独の彼方へ 円谷幸吉物語』 ベースボール・マガジン社, 1992.

河野一郎. 「解説」 シリトー, アラン 『長距離走者の孤独』 丸谷オー・河野一郎訳 新潮社, 1985.

君原健二・高橋進. 「手記 喜びも悲しみも長いみちのり」『陸上競技マガジン 1975 3月号』 ベースボール・マガジン社, 1975.

———. 『マラソンの青春』 時事通信社, 1977.

高橋和巳. 「＜志＞ある文学」『高橋和巳エッセイ集 現代の青春』 旺文社, 1980.

太宰治. 「走れ メロス」『国語 38 光村国語 810』 光村図書出版(株), 2011.

村社講平.「長距離を走りつづけて=10=」『陸上競技マガジン 1974年2月号』 ベースボール・マガジン社, 1974.

———.「長距離を走りつづけて=23=」『陸上競技マガジン 1975年3月号』 ベースボール・マガジン社, 1974.

\*文学と走る世界また各分野における志ある方々、円谷幸吉選手生誕の地にして震災・原発事故から復興を目指す福島県にこの拙稿を捧げる。